

五時教判について —法華経は超八醍醐の教え—

天台大師は、インドから数百年をかけて渡ってきた膨大な經典群を分類・整理するため、化法の四教・化儀の四教の八教と、五時の教判を説かれました。

八教の教判が、釈尊一代の説法の形式・内容を平たく分類したものであるのに対して、五時教判はさらにこの説法を時間的に区分・判釈したものと言えます。

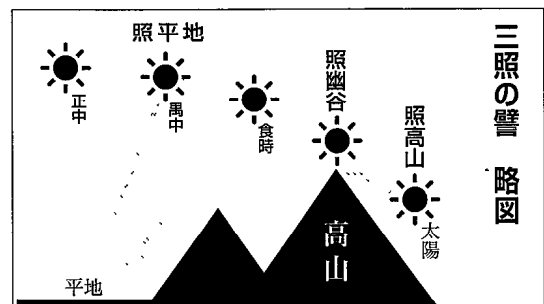
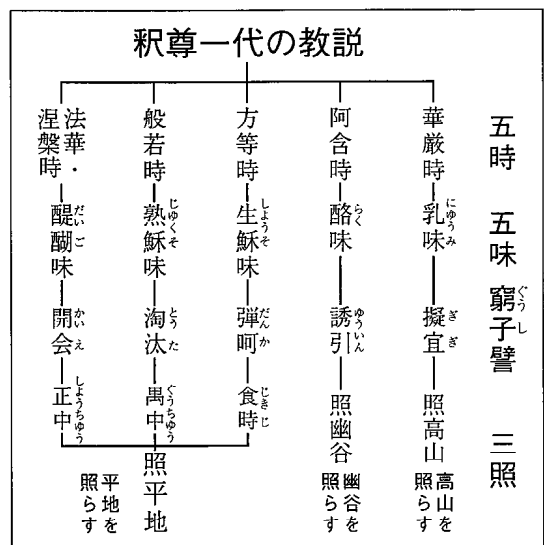
なお、天台大師はこの五時を説明するに当たって、その意義と理由について、涅槃經の「五味」、華嚴經の「三照」、法華經『信解品』の「長者窮子」の譬喩を用いて詳しく説明しています。

一、華嚴時

第一の華嚴時は、華嚴經六十巻が説かれた時期を指し、釈尊が中天竺摩竭提国伽耶城南の菩提樹下で成道し、三七日の間思惟・説法した時のことを言います。

華嚴經は、詳しくは大方広仏華嚴經と言い、教義の浅深から言えば般若經よりも勝れ法華經に次ぐもので、大乘教中でも傑出した經典です。ここで釈尊は、別教・円教という高尚な大乘の法を説き、衆生の仏道に対する能力機根を測られました。

天台の三照譬では、華嚴經のことを「日が初めて出て高山を照らす」のに譬えています。これは悟りを目前にした大菩薩たちに対して厳然と説かれた姿を形容したものです。その結果、これらの大菩薩たちは華嚴の説法を聞いて、その教えの中の実相をつかみ利益の醍醐味を味わいましたが、舍利弗等の声聞には、聾の如く唾の如き状態で、全く教法を理解することができませんでした。これは、法華經の長者窮子譬では、長者が立派な姿をした使人を窮子に近づけ逃げられたことに該当し、擬宜（よろしきところをおしはかる）に譬えます。



二、阿含時

第二の阿含時は、別名を鹿苑時とも言い、波羅奈国鹿野苑において十二年間、長阿含・中阿含・増一阿含・雑阿含の四阿含等の経々を説いた時を指します。

華嚴の擬宜によって釈尊は、声聞・縁覚の二乗の機根の低さを感じ、これらの衆生の機根を調えるため最も低級な蔵教を内容とする四阿含の小乗經を説きました。ここでは

主に四諦・十二因縁の教えが説かれ、灰身滅智という仮りの悟りに入る道が示されましたが、これはあくまで阿羅漢という小果であって、大乘の成仏の悟りから比べればはるかに低いものです。

これは、三照譬では幽谷を照らすことに、また長者窮子譬では、窮子との直接交渉に失敗した長者が、粗末な身なりをした使人を遣わして長者宅の便所掃除の職務に就かせたことに当たり、誘引に譬えます。

### 三、方等時

第三の方等時は、欲界と色界の中間の大宝坊等の各所における説法で、十六年とも八年等とも言われています。

方等の方とは広と訳し、等は均しいの義ですから「広く諸経を説き均しく衆生に施す」ということで、大乘のことを指します。

つまり、阿含の小乗経を説いたあと釈尊は、優れた種々の大乘の教えを説き、浅い小乗から深い大乘へと導いたのです。この部に所属する経は、思益経・金光明経・勝鬘経・解深密経・楞伽経・首楞嚴経・無量寿経・大日経・維摩経等と膨大な数に及び、その教理も蔵・通・別・円の四教全体にわたっています。特にこの中の維摩経は、維摩居士が舍利弗等の声聞を弾劾・呵責し、灰身滅智の小を恥じ大乘を慕わせる(恥小慕大)教えを説いています。これは、長者窮子譬の中で、長者が窮子の小根性を叱りつけて向上させる過程を指し、弾呵(はじき叱りつける)に相当します。また三照譬では、平地を照らす中で一番日の低い食時(午前八時)に譬えられています。

### 四、般若時

第四の般若時は、摩竭提国王舎城の靈鷲山・白鷲池・他化自在天宮等の四処における説法で、十四年とも二十二年等とも言われています。

般若とは、仏の清浄な智慧のことを言い、悟りを得るためには自分自身の仏道の実践により智慧を磨くことが大事であると教えています。またここでは、小乗の執着から覚めた衆生に対し、通・別・円の三教をもって般若の空を説き、大乘と小乗を対立的に考えていた方等時の執情を一切空の立場から否定し、本来すべてが大乘であることを示しました。これは、長者窮子譬では、長者が窮子に対して我が子のように接し重要な役を与えることを指し、淘汰(選り分け精選する)に当たります。また三照譬では平地を照らす中の禺中(午前十時)に譬えられます。この般若時の説法によって、衆生の機根を大乗を聞くに堪えられる状態に調えられ、いよいよ出世の本懐である法華経を説かれるのです。

### 五、法華・涅槃時

第五の法華・涅槃時には前番と後番とがありますが、前番を法華時と言い、靈鷲山における八年の説法を指します。そして後番を涅槃時と言い、拘尸那竭羅国の跋提河の畔の沙羅林における一日一夜の説法を言います。

法華時において、今まで説いた声聞・縁覚・菩薩の三乗の教法を開き廃して、一仏乗の教えを説き、一切衆生成仏の道を示されました。これを法華の開会と言います。

法華経は化法の四教でいえば、一切の経々の中でこの経だけが純粋な円教で、化儀・化法の八教を超越した最高の教えであることから「超八醍醐」の教えと言われています。醍醐とは、醍醐味のこと、牛乳から精製して最後に完成する色香味のすべてに勝れた妙味の食物を言い、涅槃経には一切の病を消滅する妙薬と説かれています。つまり仏を牛に譬え、仏の説法を牛から出る牛乳に譬えます。その牛乳を精製すると酪味になり、それがさらに生酥味、熟酥味となり、最後に醍醐味の妙味・妙薬になるように、仏の教法も華嚴から阿含、方等、般若を経て最後の法華・涅槃の経が極説の醍醐味となるのです。

この法華経は、長者窮子譬では、長者が窮子を我が子であると開顕して家業を継がせることに当たり、三照譬では正中（正午）とって一番高い位置から平地を遍く照らし出すことに譬えます。なお、法華時の中で、前番の法華経は一切衆生を成仏せしめるところから秋の大収穫に譬え、後番の涅槃経は法華経の成仏に漏れた衆生に改めて法華一乗の立場から四教を説いて成仏に導くものですから落ち穂拾いに譬え、拈捨教と称しています。



この天台大師の五時の教判によって、釈尊の一代の教説は法華経を根本に整理され、体系づけられました。

日蓮大聖人もこのところから『教機時国抄』等に、天台大師ただ一人だけが教を知る者であるとして、高く評価なされています。そしてこの天台の教判は、大聖人の仏法にあっても重要な法門の基礎として依用されているのです。